

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌

8月9月と大学は夏休み。ゆっくり充電のはずの夏休みは、執筆、会議に、大会運営にと、フル活動の2ヶ月となった。放電？それともこれこそが充電？

「劔岳」へ

8月5日

村山口で合宿をしていた静岡オリエンテーリングクラブのレースに参加した。全日本リレーに向けて久しぶりにオリエンテーリングをしたかったが、「行く」と決めて、朝早く起きるのも辛い。幸か不幸か朝6時に目覚めたので、行かない理由がなくなってしまった。4.7kmで47分は日沢の特性を考えればまああのタイムだろう。時々出場するアドベンチャーレースやトレイルランニングに備えているので長い距離には抵抗感はないが、スピードが速くない。秋への課題が一つつかめた。

8月6日

8月後半に行なわれている文部科学省登山研修所の大学生向け夏山登山の講習に呼ばれていたが、ウクライナで世界選手権がある。そう伝えると専門員の東さんが非常に残念がっていたので、事前に踏査してナビゲーションのポイントに関する課題を作って残していくことにした。2年くらい前に新田次郎の「劔岳<点の記>」を読んで、是非一度は劔岳に登りたいとも思っていた。

この日は登山研修所に泊めてもらうつもりだったが、東さんの官舎に泊めてもらった。明日黒部の上の廊下にかかる高知大学の山岳部の学生と一緒に立ち入った話はしなかったが、東さんは昨年度まで私立学校の教員をしていたという。考えるところあって、教職を辞め、この職に就いたという。彼も僕と同じ1960年生まれ。四十にして感う。

8月7日

朝一番のケーブルカーで、美女平から室堂へ。そこから歩いて劔沢へ。東さんに電話で予約をとってもらった劔沢小屋に荷物をデポして、劔岳に向かう。「劔岳」によれば、明治初期陸軍の陸地測量部が「初登頂」を果たす前には、劔岳は「登れない山、登ってはな



憧れの劔岳山頂にて。気分は柴崎芳太郎（立山周辺が初めて地形図に測量された時、劔岳に「初」登頂した測量官）

らない山」とされてきた。それが今や老若男女、誰でも登る。当然毎年数件の遭難事故がある。先日も鎖場で風にあおられた男性が転落して、頭蓋骨粉碎の即死だった。そんな知識が頭の中で交錯し、気持ちが高揚する。帰りも後ろのグループが石を落とした。遠目に見えるくらいの石が、隣の沢に転がっていた。

劔岳から帰ってきたのが、13:30。小屋に留まるにはまだ早い。行動食と水を追加して、今度は立山に登る。15年以上前、富山での学会の帰りに登ったが、その時は雄山までで、最高峰の大汝に登るのは挫折していた。大汝までピストンして、16時過ぎに小屋に戻る。

劔沢小屋では、大学院時代の先輩が金沢大学のスポーツ専攻の学生を引率して登山をしているのに偶然にも出会い、しばし昔を懐かしむ。

8月8日

久しぶりの山小屋泊で、疲れていた。ルートを検討したが、結局最もアップの少ない室堂経由で素直に黒四ダムに向かう。今や室堂から歩いて黒四に下る人などほとんどいない。途中ヤブこぎに近い部分があるなど、ルートもかなり荒れていた。体調自体は動きはじめやや辛さがあるが、後半は気持ちよく歩けた。それでも疲れがたまっていたのだろう、最後に痛恨の捻挫。歩ける程度の捻挫でよかった。3kmばかり少

し脚を引きづりながら、なんとか黒四ダムに到着した。

読図ワーク校了

8月9日

ヤマケイの山本さんとメールのやりとりをしながら、読図問題本の校正を続けた。時間の制約がある中、一日中文章を書いていると疲れる。夜は宮内と夕飯を食いながら、読図本の校正を続ける。本っていうのは、企画段階が一番楽しい。問題を次から次に作っている瞬間もイマジネーションが働く。

だが、それを商品にするために、文章を推敲し、問題を確認し、図版を作成するという具体的な形を作り上げる作業には、マリッジブルーのような憂鬱感がつきまとう。結婚ならやめればいいが、企画が決まった本はやめられない。今回は宮内と二人でその辛さもやや和らぐ。

8月11日

土曜日だが、時間に余裕のない校正の添付ファイルが送られてくるので大学へ出向く。ゆっくり起きて、自転車大学にいき、気持ちよく仕事して、昼は開放されている大学のプールで泳いで…。仕事をしながら夏の楽しみを満喫した一日だった。

8月14日

ウクライナ出発まで3日。山本さん

から次々と校正の原稿がメールや託ファイル便で送られてくる。この段階なの、「このミスもあのミスも直っていない。送ったはずの図版が入っていない！」おまけに、「空いた頁のコラム800字3本、明日までをお願いします」とか……。出発前の完成に対して、絶望的な気分になる。15日は、再び宮内と清水のファミレスで深夜まで最後の校正を行なう。校了と宣言するには気になるべきだが、後は山本さんに任せるしかない。

ウクライナへ

8月17日

エールフランスの夜便でウクライナに出発。夜便は必ずしも好きではないが、昼間のんびり仕事をして、プールに入り、ゆっくりでかけ、人気の少なくなる成田を旅立つ雰囲気は悪くない。利佳ちゃんから、sideBを楽しんでくださいねのメールがあった。日程をみるとほとんど会議で、その間にレース観戦がある。行く前からやや食傷気味だったが、会議の時間など、滞在時間の半分以下なのだ。本当はオリエンテーリングがSideBのはずなのに、間違っってヒットしてしまい、こちらもSideAのようになってしまった。きっとそういう人生と、今後もつきあって生きていくのだろう。

8月18日

パリまでに飛行機ではよく眠れた。パリで3時間ほど待ってキエフ行きに乗る。キエフ空港では、最初オーガナイザーが見つからず、タクシーの運ちゃんにつきまといわれる。市内まで200グリムニヤだという。知らん顔していると、150にすると出てきた。全く乗る気がなかったので、しばらく街までの公共交通を探す。観光バスや自家用車はロータリーに並んでいるのに、公共交通らしいものがない。諦めてタクシーに乗る前にもう一度空港ロビーに戻ってみると、ようやく運営者の迎えが見つかり、バスに案内してくれた。

まずは、日本チームの宿に行く。番場にクスリと流動食を渡して、そのままスプリントの予選へ。残念ながら通過はなかった。さすがに疲れて、9時半ごろに眠る。

8月19日

ロング予選の会場にチームの手伝いに出かける。今回のイベントアドバイザーは秋田のワールドゲームズでねちねちと監督されたノルウェーのオイビン・ホルトだ。チームの選手やコーチから「バスが来なかった」「モデルイベントが終了時間より前に片付けられて

しまった」など、散々な話を聞かされていたので、スタートで会った時、「あなたにもコントロールできないことがあるんだね」と皮肉を言ってやった。奴は珍しく弱音を吐いていた。もともと小心ものだからな、オイビンは。そして十指に余るアシスタントをノルウェーその他の国から投入していた。

今日のロングでの日本チームの可能性は決して小さくはなかったはずだが、一人の通過者もなくがっかり。2日間ジェリー以外の物を全く食べられなかった番場はスプリントを走ったが、さすがにロング予選はスキップした。ミドルならチャンスがある。

8月20日

今日はミドル予選だが、理事会が始まり、観戦は叶わなかった。朝から夕方まで延々やって、さすがに疲れる。今日も通過はなかった。力不足という以上に、ミスで自滅してしまった感がある。番場などは、何度も途中で歩いて直接帰ろうと思ったという。

17時よりチームの夕食に合流するためチームの宿にいくと、ロブが羽鳥相手にミーティングで「怒る練習」をしていた。結果が出ないことはもちろん残念だが、それ以上にチームに「闘志」が感じられないことに対して、彼なりに働きかけたかたに違いない。まだ男子のリレーは残っているが、開会式を前にして、選手個人にとっての世界選手権はほとんど終わってしまったのだ。

8月21日

午前中は理事会で、午後からは非ヨーロッパ諸国のミーティングが行なわれた。今でも、IOFの地域会議は「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」。国際化などといっても、実情はヨーロッパ外はおまけなのだ。そんな中でも、今回のミーティングではWGの出場のあり方やワールドカップのあり方など、もろもろの意見交換ができた。国の数がただ触れることではなく、こういう自律的な議論ができるような場が生まれることこそ、オリエンテーリングが真に国際的なスポーツになる前提条件なのだろう。

8月22日

ミドル決勝。天気がよく朝から暑い。会場でも日向にいと消耗する。主催者に昼食に招かれるも、ほとんど食べる気になれない。

夕方、アジア地区会議。カザフスタンから2011年の冬季アジアゲームにスキー0を取り入れるための取り組みへ

の協力要請があった。

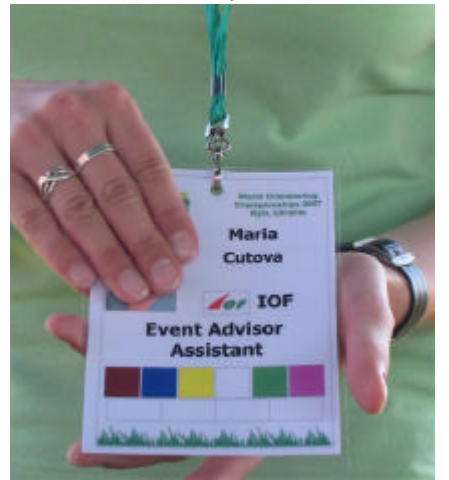
規約では、最低4ヶ国の参加チームが必要である。日本とカザフ、2009年にアジア初のスキー0の世界選手権が北海道で開催される。難しいかもしれないが、不可能な数でもない。その後は、来年韓国で開かれるであろう第一回のアジア選手権の特別ルールを議論した。動き出せば、仕事は増える。誰かがそれをしなければならぬ。



スプリント最終コントロールを通過する加藤選手。



次回こそリレーに。悔しさを胸にリレーを観戦する番場と小暮。



ウクライナの世界選手権。地元の運営力に不安がもたれ、小心者のSEAのオイビンが頼れる仲間をかき集めた。あっちにもこっちにもイベントアドバイザーのアシスタントが...

8月23日

せめてロング決勝の日だけでも涼しく願ったが、またもや朝から暑そうな一日が始まった。男子18km。世界選手権史上もっとも長い距離である。比較的平坦ではあるが、4/5程度にあるス

ペクテーター区間では、選手が疲弊した状態でやってき、水分補給をし、コーチからスポンジで身体を冷やしてもらったりしている。

フィンランドのミンナ・カウビがよいタイムでスペクテーター区間を通過する。2005年のワールドカップと北欧選手権の時から注目し続けていたミンナだが、世界選手権ではなぜかシモーネに勝てない。この日は、スペクテーター区間ではやはりフィンランドのヘリ・ユッコラに追いつかれたシモーネには勝てそうな気配だったが、逆にヘリにはややリードされている。シモーネは意地で最後の2kmでヘリを振り切ったが、ミンナのタイムを上回りそうもない。この4年間で、コンタクトを落とす不運で優勝できなかったスウェーデン大会を除けば勝ち続けているシモーネが3位になり、ヘリが初優勝を飾るのが、ヘリは最終コントロールへのアプローチでミスをして、ミンナときわどいタイムである。会場を盛り上げてきたアナウンサーもあまりのきわどさに、公式計時を参照した。そして、結果は、なんとヘリとミンナの同タイム。世界選手権史上初の同タイム優勝。昔の五輪で日本の2選手が棒高跳びで金メダルを分け合った逸話を思い出した。

8月25日

ウクライナを離れる日が来た。リレーの直後に会場を後にしたバスが時間通りにこないなどのトラブルがあったが、送りの車は定刻にやってきた。心配した出国の問題もなかったが、心配していたパリの乗り継ぎは本当に危機一髪だった。

乗り継ぎ時間は55分。シャルルドゴールのターミナルは2Fに到着するが、日本への便は2Bから出発する。誘導のバスがあったはずだが、看板を見逃したらしい。国際線どうしの乗り継ぎなのに、一回入国しなければならぬ羽目に陥った。その列をしのぐのに20分。ターミナル間にバスは走っているが、夜も11時近く。バスを待っていたら間に合わないだろうと判断して歩くが、ターミナルのチェックインカウンターにつくまでに20分近くを要した。ところが23時をすぎて、チェックインカウンターは全てしまっていた。そこにいた空港の係員に聞くと、「今日はもう遅い。あした来いという。」出発時刻10分前。普通ゲートはもうしまっている。ナイーブな旅行者ならここで諦めたかもしれないが、荷物が積まれている以上そのまま飛び立つはずは絶対ない。「冗談じゃない乗り継ぎ便のはずだろ、第一俺の荷物乗ってるんだぜ」。散々騒

ぐと、じゃあ、1階のインフォメーションへ行けという。そこのお姉ちゃんが、係員のいるトランスファーのカウンターに案内してくれた。やはり僕のせいで、機内では荷物の数と対応させるための人数確認が始まっていた。そのせいか、脚ののぼせるドア際の席となった。

帰国時のもう一つのトラブルは、大学においていた車のバッテリーがあがっていたことだ。やや劣化していたので、10日間もたなかったのだろう。チャコは綾のサッカーの合宿に出かけていた。仕方なく荷物だけはおいて帰ることにした。一瞬気がめげたが、案外気持ちよく帰って帰れた。

8月29日

愛知教育大学の実習で戸隠に向かう。ほぼ1年ぶりに5時間を超えるドライブをした。無事到着したが、交感神経が興奮し、鎮めるのに時間がかかった。夜半に雨が降り出した。天気予報を見ると、明日も明後日も雨のようだ。

8月30日

愛知教育大の一行が到着した。雨は降ったりやんだり。予定していた屋外での地図読み実習はとりやめ、屋内でできることを、準備した教材を使って行なった。読図ワークブックの執筆のためにためた写真や教材が役立つ。

翌31日はメインのプログラムであるスコアオリエンテーリング。午前中のミニ・オリエンテーリングはやはり雨だったが、短い時間なので、傘をさして体験してもらった。午後やはり雨が降っていたが、全員大学の陸上部で雨の中での試合・練習には慣れているので、90分のスコアオリエンテーリングを実施した。雨で十分なプログラムの消化はできなかったが、「実際にやってみて、はじめて等高線の意味がわかりました」というコメントが嬉しかった。

最終日の1日は、先方の都合で朝早めに終了になった。5年間眺めながら登ったことのない戸隠山に登ることにした。戸隠高原から眺める戸隠山は、どこに登山道があるのかと思うほどの岩壁に囲まれた山だ。それは覚悟の上だったが、実際登ってみると、岩場の連続は予想以上だった。核心部は、「ここは普通鎖場だろう」と思うくらいのおどろきだった。自分の後ろにいる初老の夫婦は果たしてここを通過できるのだろうか、ちょっと気になった。

下りは鎖場に嫌気がさして、連峰を軽く縦走して、戸隠牧場に降りた。眺

望のよい縦走路、沢を下る道から、裾野のトレイルまで変化に富んだランニングが楽しめた。

9月2日

4日ぶりにメールを開けてみると大量のメールが来ていた。その中に世界選手権の主催者からの「ご挨拶」メールが来ていた。大会への参加へのお礼と、大会中の不具合へのお詫び、そして現在の心境について語ったメールだった。差出人は、イベントオフィスのチーフを務めていたジュリアだった。「大会が終わったら、きっととっても幸福でほっとした気分になれるのだろうと、1月前に思っていた。でも終わってみると不思議なことに、皆さんの期待に応えようと必死にやっていたあのきつい時間がないことに物足りなくさえ思う」

自分も2年前に同じことを経験した。共感を覚えて返事を書いた。「今はきっとまだ興奮しているけれど、間違いなく疲れているから、健康に気をつけ、十分休養とってね」と。2日後に返事がきた。「そう確かに疲れているわ。昨日は、『誰かの登録を忘れた!』、『地図が必要な枚数ない!』そんな怖い夢を見て飛び起きたの。でも、残念なことに休んでいる時間はないわね。私のこの夏の休暇は全てWOCのために使ってしまった。先週の月曜日から仕事なの。」欠点のない世界選手権ではなかった。それは彼らもよく承知している。でも、同時に彼らが精一杯やったことも私たちは分かっている。弱小国での世界選手権が印象深いものになるのも、そんなオーガナイザーの努力の賜かもしれない。

「チャンピオン」たちと

9月9日

朝5:40に起きて、マウンテンバイクを自走して清水駅まで。そこから電車で修善寺まででかけて伊豆サイクルスポーツセンターで行なわれているマウンテンバイクの講習会に参加した。研修会や講習会の講師をすることは日常だが、講習会の参加者になるのは、多分オリエンテーリングのディレクターへの移行講習以来数年ぶりだろう。新鮮な気分だ。今回は午前が体力測定、午後が安曇野アドベンチャーレースの主催者でアトラクタ五輪の日本代表の小林さんが講師という願ってもない内容だったので、ちらしをもらった1週間前に、定員を気にしながらあわてて申し込んだ。参加者が少ないとのことだったが、着いてみると一人。「小林さん独り占め?」実際には職員の11歳になる娘さんと二人だが、こんな贅沢な

講習会があるだろうか。向こうは向こうで、「11歳の女の子と47歳の初心者の、きっとメタボのおじさんかあ・・・」と思っていたようだ。体力測定でV02maxは推測値だが、61。思っていたよりも落ちていないことで、モチベーションもあがった。

今日の講習は「初心者対象」コースだったが、当然二人のためにカスタマイズされて、おまけに安曇野主催者のA&Fのメンバーも加わって、講習というよりも11月に開かれるレース対策になってしまった。帰りは沼津まで自走してたくたになったが、それに見合う収穫のある講習会だった。翌日は、朝からやや疲れ気味。あちこち筋肉痛。



MTB講習会。小林可奈子さんとA&Fのメンバーと。

9月15日

顧問をしている大学弓道部の師範が九段に昇進した。米寿、本の出版と慶事がかさなり、この日が記念のパーティーである。4人いる来賓の一人、しかも挨拶もせよという。伝統的芸道のお祝いに来賓として呼ばれたらいくら包めばいいのだろう。さすがに1万では恥ずかしいだろうと思って、剣道をしている同僚に尋ねると、「いくらでもいいんじゃない。お祝いする心があれば」という。困って、1万円とりあえず包んだが、ロビーに到着するなり、「あ、絶対だめ」と直感できるようなパーティーだった。

参加者の平均年齢が66歳。弓道関係者がほとんどだが、段位は全て6-8段という人ばかりだ。師範の親戚や部代表の学生1名を除けば、僕が一番年下くらいの勢いだった。

改めて経歴を聞くとすごい。史上たった一人の天皇杯2連覇。昭和の時代に改訂された弓道教本の188枚の写真のうち、1/3近くのモデルにもなっている。まだまだ自分は青二才だ。

9月17日

久々のリレーでワクワク感があつた。軽い胸痛はあるが、走れば辛いのは当然だ。登りはスピードに乗れず、前半あつという間に2分後の松澤に追いつかれる。紺野にはくらくらしたが、こちらミスしてみすみす松澤に再び追

いつくチャンスを失う。そんなに速くないのに、胸は十分追い込まれている。終わってみれば、トップと10%強差がついた。ランニングスピードがその程度遅くなっていることを考えれば当然か。ちょっとばかり「悔しい」と思ったことも収穫だ。もうだめなのか、まだやれるのか、煩悶は続く。

ひょっとしてやる気？

9月18日

心理学会で東京に出たついで御徒町のアーツスポーツに行って、ヘッドライトを買った。散々迷って、店員の説明も聞いて、プリンスの3WのLEDランプを購入。車のヘッドランプかと思う明るさで、これならヘッドランプだけで十分野山で走れ、地形を把握できる。12000円也。山岳耐久レースに向けてやる気になっている自分を発見。

9月22日

三保で練習会。自分の家の近所で集合して、すぐ近くの森で50人を越えるオリエンティアが練習する。とつても北欧気分。暑い中トップスピードで走り、疲れまくったが、ハイな一日。翌日の北海道訪問に備えて、夜東京へ移動。

翌日は朝一の飛行機で、スキ-0世界選手権の準備のため北海道へ。まずは北大大会に参加して北大OLCに協力を依頼する。夜はコンパまで参加してしまった。今時珍しい学生らしいコンパを楽しむ。でも自分が顧問している静大だったら、あのコンパはとても危なくてみられない。

翌24、25日は、道協会会長挨拶やルスの見学と宿泊の交渉。午後東京に帰って、17時からJOAの事務局で総務会を主宰。



三保での練習会で、松原と海岸を走る。

9月26日

遭難対策の番組を作っているNHK津放送局の取材を受けた。ちょうど好日山荘の読図講習をやる日だったので、そちらの方も取材していった。初級講習として、地図記号や等高線の基本的な読解を行なった。記号一つとっても、ただ覚えるだけでなく、現実がどうなっているかを知ることの必要性、原理

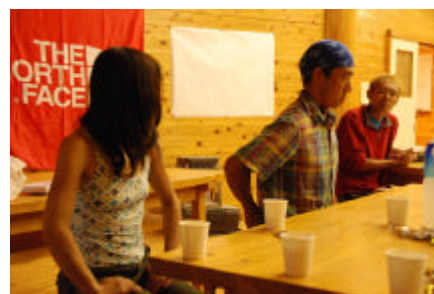
を複雑な実際の地形図に適用させる難しさなど、初級だからこそその地図読みの深さを感じてもらえたようだ。



好日山荘で、読図講習。この活動はまだポテンシャルを秘めている。

9月29日

三河トレイルランニング前日の講習会。豊橋で横山さんと間瀬さんを拾って、作手に向かう。間瀬さんは今や女子トレイルランニング界のカリスマで、あのほわーんとした語り口からは想像できない強さを発揮している。この日も、初対面の同乗者がトライアスロンをしていると聞けば、クロールのこつを聞くし、横山さんとは延々身体のケアやトレーニング法の話をしつづけている。目標にまっすぐ向かうというアスリートとして最大の武器を、あのほわーんとした外見の中に持っている。



三河トレイル前日講習会。横山さん（中央）、間瀬さん（左）。キャミソール姿がかわいい間瀬さんだが、背中にはもっと感動。

9月30日

三河トレイルランニングレース。雨中にもかかわらず、9割近い人が参加し、泥だらけになりつつも走った。ショートコースでは誘導の失敗や、抽選会などの不手際も出た。多くの人が大会を楽しんでくれるのはありがたいことだが、ハンドメイドも限界に近づいているのかもしれない。

（村越 真）